

## 知能はどうやって測るの？

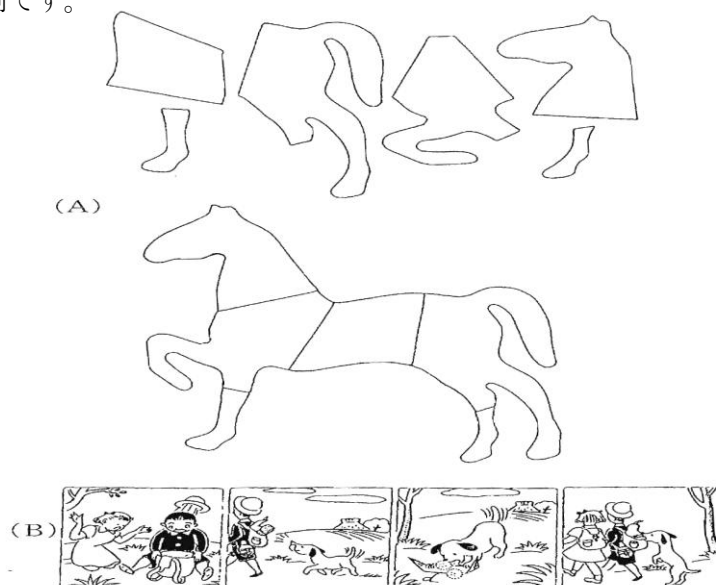
知能を測るために、様々なテストが考案されています。その中でも代表的なものを2つ紹介します。

### 1. 集団式知能検査

まだ全ての人が十分に教育を受けていなかった第一次世界大戦の頃、軍隊においては誰をどこの部隊や場所に配属すればいいのか、という問題が生じました。兵士を適材適所に配属する目的で、ヤーキス (Yerkes, R. M)らによって開発されたものが「集団式知能検査」です。この検査は言語を用いた $\alpha$ 式と、符号・数字・絵などだけで構成されている $\beta$ 式があります。教育を受けておらず、文字の読み書きができない人は $\beta$ 式を使用して、知能を測定したのです。日本にも早くから導入され、学校を中心に広く利用されています。しかし、短時間で大勢の集団に実施出来るように問題の量と質が限られているため、少数回の測定で、個人の知能レベルを決定してしまうことに対しては、疑問が残ります。

### 2. ウェクスラー式知能検査

ウェクスラーは、児童用知能検査 (WISC)、幼児用知能検査 (WPPSI)、及び成人用知能検査 (WAIS)を開発しています。これらの知能検査は、人間の知能はいくつもの因子が集まって構成されているという観点に立って作られています。そのため、検査は数種類の下位検査からなっていて、それぞれの検査ごとに成績が折れ線グラフで表現されるように工夫されています。WISCは言語性と動作性の下位検査で構成され、さらに言語性は知識(一般教養に関するような知識を問う)・類似(2つ以上の物や概念の間に存在する類似性を問う)・計算(計算問題)・単語(語彙の豊富さ・理解度を問う)・理解(社会・経済の常識や日常生活の知識を問う)・数唱(提示された数を暗記して復唱する)から、動作性は絵画完成(不完全な絵画を完成させるように描き加える)・絵画配列(図を並び替えて1つのまとまった物語を作る)・積木模様(積木で手本通りの模様を作る)・組み合わせ(与えられた紙片を組み合わせせて意味のある形を作る)・符号(問題の符号に対応する符号を書く)・迷路(迷路をとく)から構成されています。下図は組み合わせ問題(A)と絵画配列問題(B)の例です。



WISCの組み合わせ問題(A)と絵画配列問題(B)